

書評・紹介

田中教照著

『初期仏教の修行道論』

吉元信行

この度、武蔵野女子大学教授田中教照博士によって、原始仏教における修行道論に関する標記の大著が上梓された。本書は、平成二年度、東京大学に提出された学位論文「修行道論の展開と初期アビダルマ論書」に、第一章「最初期仏教における修行道」を加えてまとめたものであるだけに、綿密な考証と、新しい学説を多く含んだ意欲的な業績となっている。

田中博士は、東京大学において学問を志して以来、ただ一筋に、他の研究者のあまり取り組もうとしない原始仏教及び初期アビダルマにおける修行道論に関する業績を学界において地道に発表してこられた。評者のデータベースだけでも博士の修行道論に関する業績として、次のような論文が登録されている。

「南北両アビダルマの縁起説」(平川彰博士古稀記念論集)「仏教思想の諸問題」春秋社・一九八五)

「舍利弗阿毘曇論」の禅定観」印度学仏教学研究第四〇巻一

号

「戒・定・慧——修行道の体系」岩波講座『東洋思想』第一〇巻(インド仏教3、岩波書店・一九八九)

「インド仏教における信」淳心学報第八号

「使品より見た『阿毘曇心論』の位置」印度学仏教学研究第三六巻一—号

「法蘊足論」における修行道論」仏教学第二二三号

「部派仏教における智の展開——パーリ仏教の修行道との関連」高崎直道博士還暦記念論集『インド学仏教学論集』

「有部の修行道論と七覚支」仏教学第一九号

もちろん、評者がデータベースを作成する以前にはさらに多くの業績が博士によって発表されている。これら諸業績の蘊蓄が、ここにこの大著としてまとめられたわけであり、専門も近く、ずいぶん以前より博士と学問的親交を深めさせていただいた評者としても、出版を心からお祝い申し上げるものである。

著者も序文で述べているように、「修行道論」という用語はなじみの薄い言葉である。本書は、決して仏教の修行とは何かという解説書ではない。ここに言う「修行道論」とは、仏教の修行を、つねに正覚に至るためのプロセスとして見る視点をもった用語である。従って、本書は、仏典において議論の対象になった修行道についての研究である。

本書では、最初期仏教における修行道から初期アビダルマ論書に説かれた修行道への展開を点検していく過程において、修行道論が種々異なったものとなっていたことの理由の解明が

主眼となっている。著者は、修行道論というはっきりした視点で初期アビダルマ論書を読んでゆくことよって、従来よくわかっていなかった各論書の成立のメカニズムを見事に解明している。

本書が出版されたちょうど同じ頃、ヨーロッパで本書とテーマをほとんど同じくした英文の著書が上梓された。イギリスの The University of Bristol 講師 = R.M.L. Gehin 博士による *The Buddhist Path to Awakening—A Study of the Bodhipphkhiya Dhammā*, Leiden: E. J. Brill, 1992. である。該書も田中書と同様に、the University of Manchester に一九八七年に提出された博士論文の出版であるという。両書はほとんど同じ頃出版されたため、両著者はお互いの著書を参見できていないが、両書とも初期仏教からアビダルマへの修行道(特に三十七道品について)を扱っている。ただ、田中博士が修行道論の展開と論書の成立過程を主眼にしているのに対して、Gehin 博士は、パリ仏教(ニカーヤからアッタカターまで)における三十七道品(三十七菩提分法)の詳細な解説を試みているところから、両書はお互いに相補い合う関係とすることができようか。本書評に当たっても該書を逐次参見したことを申し添えておきたい。

従来学界において、修行道が論ぜられる場合、主としてアビダルマの中でも北伝の説一切有部の論書、なかんずく、後期アビダルマ論書である『俱舍論』を中心にしたものであり、南伝七論や六足発智等の初期アビダルマ論書を中心に論ずることはほとんどなかったように思う。それは、これら初期アビダルマ

論書の所説があまりにも多様であり、ひとまとめに論ずることがなかなか困難であったことによる。ところが、この田中博士の著書は、この難所に真つ正面から取り組んだ意欲的な業績とすることができている。以下、本書の論述に従って、簡単に紹介しよう。

## 二

本書は、第一篇(篇名はないが)「初期仏教における修行道」と第二篇「初期アビダルマ論書と修行道論」に大別される。

第一篇第一章「最初期仏教における修行道」は、博士論文にはなかったところのようで、本書のための書き下ろしである。

ここでは、経典史的にも最古の部分に属し、仏陀当時の仏教の形態を忠実に伝えている資料として重視されている『スッタ・ニパータ』『ダンマパダ』『テラガーター』『テリーガーター』などの韻文文献における修行道が検討される。経典史的に見ると、これら最古と言われる資料にしても、やはり仏滅後に編纂されたものであるから、後世の付加部分もあり、厳密に仏陀当時の形態を伝えているかどうか問題のあるところが多い。著者はこの点をよく認識し、これら最初期仏教の資料の取り扱いに関する批判的研究として学界で評価を受けている荒牧典俊教授の一連の業績(『原始仏教聖典の成立について』『東洋学術研究二三一』、『Aṭṭadāṇḍasutta (Sn 935-954) は積尊の言葉であり得るか』『日本仏教学会年報五〇』、『SN Mārasamyutta I の成立について』『同四八』)の成果にしたがって、『スッタ・ニパータ』に

において、第一人称で語られているまさに積尊の言葉と見られる偈の中の修行についての表現に注目している。ここで、荒牧教授が最初期仏教における積尊独自の修行が「禪定修行」であったとするのに対して、田中博士はこれに疑義を呈し、「念(sata)」が修行として重要な位置を占めたことを主張する。

ただ、これら最初期の經典に説かれた「念」が修行道であるとするのはいささか問題がある。そもそも「念(sati, sata)」は修行者の心構えとでもいふべきもので、後に、「四念処(satipatthana)」や「随念(anusati)」等の修行道に展開するものである。原始仏教における出家道の徳目としての「信・勤・念・定・慧」における「念」であり、また、「念」は、後のアビダルマでは、諸法の分類の中で「心所(cetasika)」という心理的要素である。

田中博士は、「念が修行として重要な位置を占めているのではないか」(本書 p. 17)と言いつつ、別のところで「八聖道」について、「正精進と正念は(中略)正定へと修行を達成させる修行の基礎となるものである」(p. 122)とも述べている。おそらく博士が「はしがき」に「今日、もっとも古いとされる文献に念ずるという修行法が強調されていることは、念仏の伝統に身を置くものとして率直な驚きを禁じえなかった」と述懐しておられることに関わると思われるが、「よく気をつけて(sato)」という文脈を「念」として修行道と見ることができであろうか。むしろ、修行道の基礎となる心理作用と理解した方がよいのではないかと評者は考える。

ちなみに、先に紹介した Gethin 博士も「念」を修行道とは考えていないようである。彼は「念(sati)」を四つの要素に分けている。①心にあったものを忘れないこと、②本来的心の現前ですれ以後心を防衛するもの、③心に呼び起こすこと、④ありのままに見ることのできるような智に関わる(Gethin p. 44)。

④の要素については、田中博士も「念は法を知る智(hāna)を基礎としてそれを失わないことの意味をもつ」(p. 31)と指摘している。

このように、「念」を修行道とする博士は、『スッタ・ニパータ』でも最も古い部分といわれる「Aññakavagga」において、欲望を回避する方法として、「念」が修行の中心に置かれていると言う。そして、「Parāyanavagga」において、「念」の前に無明を破るための「了知解脱」という知的な面が強調されることを指摘する。さらに、「Uragavagga」において、出家道が強調され、「Cūlavagga」「Mahāvagga」において、業を制するためめの修行として、縁起の観察、四諦、三明、解脱という涅槃への道がほぼ輪郭を整えたとする。

次に、『ダンマパダ』『テラガーター』『テリーガーター』など、初期の原始經典における修行道を点検し、そこに五根・五力・六神通・七覚支・八聖道などの修行道が現れ、三十七道品すべてが出そろい、後の阿含・ニカーヤに見られる修行道の骨格がほぼできあがっていることを明らかにするが、最初期仏教における三十七道品の形成過程がこのような形で明らかにされたことは、本書の一つの成果と言えよう。ただ、『ダンマパダ』

のところ、第二五偈に、「賢者は流れが押し流すことなき中州 (dīpa) を造れ」とあるところを『スッタ・ニパータ』一〇九三偈(実際は一〇九四偈)の「中州」は涅槃を意味しているから、中州を不放棄とする『ダンマパダ』は、目標をかなりダウンさせていると指摘する (p. 70) が、『スッタ・ニパータ』では明らかに涅槃の異名としての「中州 (dīpa)」であり、『ダンマパダ』は、洪水の中の「中州」という譬であるので、両語を同一次元でとらえてよいかどうか、問題は残る。

**第二章「阿含・ニカーヤにおける修行道」**では、八聖道を中心とした修行道、八聖道と七覚支と四念処の関係、戒・定・慧の修行道について、初期アビダルマとの関連において論究される。前章において、初期仏教における修行道の展開というところへ向けられた博士の視座が、この章で、初期仏教から初期アビダルマへの修行道論の展開へと大きく転換しているようである。ここで博士は、『中部経典』「第四十経」及びその相当諸漢訳の比較検討を行い、従来パーリより古い思想をもつとされていた漢訳に説かれる八聖道が、四諦の思惟を根底に置くという観点から、思想的に発展した段階にあるとするのは興味深い指摘である。なお、この箇所については、まったく同じ資料を使って、Gethin 博士も詳しい論究をしているので、参照されたい (Gethin: pp. 216-223)。

さらに本章では、七覚支や四念処についてもパーリ・漢訳の厳密な比較検討がなされ、そのうえで、初期アビダルマ論書との関連が考究される。そして、八聖道は三十七道品の全般にわた

たって一貫する修行道という面をもち、七覚支は修行道の最終段階を担うものであり、四念処はその前段階を引き受けていると結論する。また、阿含・ニカーヤの相違は、初期アビダルマの南北の相違と符合し、部派の伝承の間に生起し、次第に修行道論化していったことを明らかにする。初期アビダルマ論書の中でも特異な論書である『舍利弗阿毘曇論』は基本的に南伝に依拠し、それを改変したものであると説明する。

**第二篇「初期アビダルマ論書と修行道論」**では、まず、序において、初期アビダルマ論書の成立過程やその新古をめぐる諸先学(木村泰賢、椎尾弁匡、渡辺模雄、和辻哲郎、山田龍城、福原亮敏、E・フラウワールナー、桜部建等の各氏)の所説が紹介され、諸説紛々として、未だに定説の確立していない状況を説明する。そして、それらの所説を検討した上で、博士は、いずれの見解も説得に足る論拠が十分に提示されていないとし、修行道論の展開を手がかりとして、この問題について再検討を試みようとする本書の意図を提示する。その理由として、博士は「修行」というものが最初には具体的実践徳目を修習することにはじまり、やがて理論的説明や修行段階設定の妥当性を論ずる理論へと漸次に展開し、その展開は不可避的であると思われることを基準にとれば論書の新古がはかれると考える」(p. 211)と説得力のある方法論を提示している。

そしてまず、最初期の一連の論書とされている『法蘊足論』『分別論 (Vibhaṅga)』『舍利弗阿毘曇論』などの章分けに注目し、三論書とも修行に関する章が大部分であるが、中でも『法

蘊足論』が形式的に一番大きな手直しをしていることから、第一章『法蘊足論』の修行道論』の再検討から始めている。

ここで、田中博士は、『法蘊足論』に修道段階論が説かれておらず、『集異門足論』より新しいとする従来のおおかたの説を批判し、この論書の前の方にさりげなく新しい修行道論が付加され、後の方に古い阿含經典以来の修行道論が説かれていることを明らかにしたうえで、『集異門足論』が『法蘊足論』より新しい可能性を示唆する。

そこで、第二章『集異門足論』の修行道論』において、『法蘊足論』と『集異門足論』の古い部分における修行道論（有漏・無漏道、身念住、三無為、四修定など）を詳細に検討した結果、『集異門足論』の方が新しいことを明らかにする。また、逆に『集異門足論』の方が古いと考えられる部分もあり、これらの矛盾を解決するため、田中博士は、『法蘊足論』を新旧二つの修行道論に分離して、『法蘊足論』第一から第五までは『集異門足論』より新しく、第六から第二一までは古いという今までにない解決案を提示している。そして、『集異門足論』が伝統的・固定的な古い修行道論を説いていることから、より古い論書に見えることを認めた上で、諸々の新しい修行道論をも提示していることを見失ってはならないと、桜部建博士や今西順吉教授の説を辛辣に批判しているので、いずれそれらの先生方からの反論も提示されるであろう。

また、九十八随眠の成立事情について、初期アビダルマ論書の綿密な比較検討によって、七随眠↓六随眠↓十随眠↓九十八

随眠という定説を批判し、七随眠↓八随眠↓（五見）十二随眠↓九十八随眠という新しい成立過程を提示する。そして、各論書の新古の問題は、一括して論じられるものではなく、それぞれに付加増広やまた翻訳年代、訳者の付加の問題もあり、慎重に各主題ごとに検討する必要性をあげ、少なくとも三十七道品という修行道の中心課題に関しては『集異門足論』の方が新しいと結論する。

第三章『舍利弗阿毘曇論』の修行道論』では、この特異な論書の所説をニカーヤのそれと比較検討して、『人施設論』『集異門足論』などと比べて、禪定重視の傾向が強いことを指摘する。ここで博士は、四念処と涅槃の関係を検討する中で、「涅槃が四沙門果であるという解釈は一般的なものではないから、『舍利弗阿毘曇論』に特異な解釈といわねばならない」(p. 36)としているが、たとえば、『阿毘達磨集論』(大正三三・六八一c)などでは、滅諦を世俗と勝義に分け、さらに不円満、円満、無莊嚴、有莊嚴という点から滅諦であるとされ、このうちの不円満が有学、円満は有莊嚴が無学における滅であると解釈されるから、これらの滅(涅槃)は四沙門果に相当することになる(拙稿「阿毘達磨集論における滅諦の諸定義」印度学仏教学研究二六―二、三七〇頁参照)。このことは、また『解脱道論』に説かれる五解脱のうち断解脱(出世間道を修し能く結を滅除する)と捨解脱(果を得るときの楽心)(大正三三・三九九c)などとも関わるであろうから、このような涅槃の解釈も説一切有部以外にあったであろう。このことは「滅はすなわち涅槃であっ

て、煩惱の滅ではない」(p. 414)との指摘とあわせて、興味深いところである。このことはさらに、第四章『分別論』をめぐる諸問題」の中で、心理論をめぐって『分別論』(Vibhaṅga)との関連において詳しく検討され、『舍利弗阿毘曇論』が南北両伝の中間に位置している特殊な論書であることを明らかにする。

このような初期アビダルマ論書の比較検討の結果、本書では、『法蘊足論』『舍利弗阿毘曇論』『分別論』は共通する伝統から出発して、現存のような相異なる三論書になったことが明らかにされた。しかも、これらの論書には、古い阿含・ニカヤにも説かれる修行道と、後に各部派が独自に発展させた修行道が重層的に展開されているメカニズムも解明された。中でも『法蘊足論』では、他の論書に比べて四聖諦が重要視されているが、それはそこに説一切有部の見道論の胚胎の可能性のあることが明らかにされる。さらに『舍利弗阿毘曇論』は、南北両アビダルマの折衷的位置にありながら、どちらかといえば南伝の方に緊密な関係を持っていることも実証された。そして、今まで正体のよくわからなかった『舍利弗阿毘曇論』ではあるが、その成立年代は『分別論』の後、『法蘊足論』の前あたりに位置づけられると結論する。

### 三

以上、本書の論述にしたがって、評者の興味のおもむくままにその概要を紹介した。四六〇頁を越える大著を僅かの紙幅で紹介したため、遺漏のあることを恐れるが、本誌における書評

の紙幅制限ということで容赦願いたい。本書を通読すると、いずれの箇所を読んでも、博士の綿密さと客観性、そして、修行道に関する執拗なまでの熱意が随所に滲み出ている。また、各章末に設けられた註には、古い文献から最近の内外の研究まで諸文献が網羅されて紹介されており、貴重な資料ともなる。

ただ、博士がフランス留学中に師事されたという Andre Bareau 博士の部派仏教に関する不朽の名著 *Les sectes bouddhiques du Petit Véhicule*. Paris: Ecole française d'extrême-Orient, 1955 についてほとんど言及されていないのはどうしたことであろうか。もう一点、本書には多くのパーリ語文献が使用されているが、その索引が「印欧語索引」(すべてパーリ語で欧語はない)として、それも英語のアルファベット順に三頁しか当てられないのは、せつかくの大著であるのに、誠に残念である。パーリ語のアルファベット順による詳細な「パーリ語索引」(できればサンسكريットも含めた)が是非ほしいところであった。

従来、学界において問題とされる修行道論といえは、もっぱら『俱舍論』等の説一切有部の論書を中心としたものであり、また、原始仏教のそれは主として南伝パーリを中心としたものであった。したがって、本書において田中博士が試みた分野は、ちょうどそれらの研究の及ばない空白部分であるといっているであろう。そして、これら初期アビダルマ論書の成立については、最初にも言及したように諸説紛々として、その内容はなかなか明らかにされなかった。しかし、この度田中博士は、修行

道論という視点から明解な方法論で従来の難点を見事に克服し、説得力のある論旨を展開されたことは近年見られなかった快挙といえよう。本書は、初期仏教の修行道論の研究ということにとどまらず、初期アビダルマ論書の文献成立史の有力な方法論を提示するものとして、今後の学界を益すること計り知れないものがある。

なお、本書では触れられていないが、田中博士は、印度学仏教学会などで、中期アビダルマ論書である『阿毘曇甘露味論』『阿毘曇心論』『雜阿毘曇心論』『八健度論』『大毘婆沙論』における随眠説の検討などの研究発表をしたこともあり、また、平成一〜二年度、評者が代表者となった文部省科学研究費一般研究Bの分担者として、『阿毘達磨集論』における修行道論を担当していたこともあり、田中博士のその後の研究はおそらく中期・後期のアビダルマ論書だけでなく、大乘の論書にまでも及んでおり、本書を嚆矢として、インド仏教全般における修行道論の展開まで研究が及んでいるはずである。それらの業績の一日も早いとりまとめ出版を期待するものである。

最初にも言及したように、本書は初期仏教における修行道論

の展開を点検することによって、初期アビダルマ論書の成立過程を明らかにすることに主眼が置かれた。そのため、仏道修行とは何か、仏教思想における修行道の位置づけ、修行道の形成過程、三十七道品という修行道相互の関係などの諸問題については力点が置かれていないように思う。その点、Gettin 書にはかなり詳細に触れられているので、博士による同書の評価も是非聞きたいところである。

いづれにせよ、初期仏教における修行道論に関して従来盲点になっていた部分に焦点を当てた田中博士のこの業績を、他に類書がないという点も含めて、修行道論に関する輝かしい金字塔として讃え、インド学、原始仏教、アビダルマ仏教、インド大乘仏教、あるいは、中国・日本仏教における修行道論等を専門とする読者諸兄姉に推奨するものである。

(本稿は、平成五年度文部省科学研究費一般研究Cによる研究成果の一部である。)

(平成五年二月、山喜房仏書林刊、A5判、はしがき・目次  
一一頁、索引一一頁、本文四六四頁、定価一六、〇〇〇円)